

1. 実習前に立てていた目標について

● 英語で医療行為を行えるようになる

マレーシアでの医療における共通語は英語でありスタッフと英語で会話する機会は数多くあった。もともと英語はマレーシア人にとって共通語の一つではあるものの母国語ではないためか難しい単語や表現を使う事は少なく意思疎通を行うのはそこまで難しくなかった。また懸念していた医学英単語については、現地についてからも勉強を続けることで8割方は理解することができたと思う。レポートを書いたりカルテを読んだりする分には全く支障はなかった。しかし患者さんとのコミュニケーションについては事前情報と異なり、ほとんど英語を話すことのできない人ばかりであった。このため時には身振り手振り、時には看護婦さんに通訳してもらいながらの会話となり満足のいく診察を行うことはできなかった。

● 熱帯医学を学ぶ

今回の実習先としてマレーシアを選んだ理由の一つに熱帯病を見てみたいという事があったが、実際に配属された先は整形外科であったために熱帯病患者を入院から退院までじっくり見ることはできなかった。熱帯病患者は内科病棟にいと聞いたので時間を見つけてたまりにのぞきに行った所、ちょうど入院したての熱帯熱マラリアの患者がいたので問診をしたりはした。しかし残念ながら回診に参加したり担当医に話を聞いたりする機会はなかったためこの症例について十分な理解ができたとは思えない。整形外科の医師にデング熱とマラリアについての軽いレクチャーは受けたがこの項目についての達成度は不十分であったと思う。

● マレーシアの学生たちと積極的に交流を行う

かなりのマレーシアの学生が日本に興味を持っているようで彼らの方から話しかけてきてくれたのでこの項目を達成するのは簡単だった。特に私たちと交代で大阪大学へ留学する予定だった学生たちはよく面倒を見てくれ、一緒に買い物に行ったりご飯に誘ってくれたりしてくれた。

私が配属された整形外科は4年生が実習を行う科で、最初の一週間は彼らと一緒に授業を受けたり外来実習を行ったりしたのだが、二週目からは4年生は選択実習でSarawak州の外に出て行ってしまったので整形外科にいる学生は私一人になってしまった。しかし5年生の講義に顔を出したり夕方に一緒に遊びに出かけたりして数多くの友人を作ることができた。彼らとテストのこと、生活のこと、将来のことなど様々な話をしてお互いの理解を深めることができた。

最初にお世話してくれた2・3月に大阪大学で実習を行う学生たちについては、私たちが大阪に戻ってきた後一緒にご飯や旅行に出かけたりして、引き続き交流を行った。

2. 成果・課題

生活面では非常に充実した一ヶ月であった。マレーシアはムスリムの国でありながら人口の三割をチャイニーズが占め、さらにそこに無数の少数民族がいるという日本とは全く異質の国である。ここで一ヶ月暮らし様々な人と交流したことで、私たちが日本では普段目にすること無い、民族のアイデンティティー、宗教の問題、対日観、歴史問題など数多くのテーマに触れることができた。特にチャイニーズについてはマレーシア人でありながらも、どこかにマレーシア人とは違うという意識を持っており、かといって中国のチャイニーズとも違う不思議な人たちであった。話をしていると独特な考え方を聞く事ができて非常に面白かった。休日には仲良くなったマレーシア人とジャングルトレッキングをしたり山登りをしたり、ボルネオの大自然に触れることができた。

反面、学習面はあと少しだったように思う。整形外科を一ヶ月回することで英語での診察を行ったりサマリーを書いたりして英語の能力を伸ばすことはできたが、熱帯病などの新しい

知識を手に入れることはできなかった。整形外科の先生方は学生教育に熱意を注いでおられ、できればその講義を受講したかったが私が到着したのはポスティングの最終週であり、残念ながらそれはかなわなかった。

今後の海外実習の課題として、事前に相手大学とのカリキュラムについての打ち合わせ（自分が何をしたいか、何を見たいか、現地の学生のカリキュラムはどうなっているのか）をし、しっかり行っておくこと、そして簡単な医療単語については現地語を覚えておくことで、学習面で得られる成果はより大きくなるのではないかと思う。

3. UNIMAS の教育について

UNIMAS の特徴として、5 年制であること、通常二人部屋の寮生活を行うこと、休みが非常に少なくトータルで一ヶ月弱しかないこと、各科が臨床講義と病棟実習をセットで行うこと、教育では外来能力を重要視していること、先生と生徒の距離が短いこと、試験が非常に難しいこと、試験にはアドバンスドオスキーが含まれること、もちろん講義は全て英語であることなどが挙げられる。

この中で UNIMAS が大阪大学に比べ優れている点として次の点がある。

- ・ 臨床講義に続いて病棟実習が行われる

UNIMAS では知識のインプットを行った直後にアウトプットの機会が与えられ、これが知識の定着を助けている。

- ・ 診断学を重視している

UNIMAS の学生は病棟実習の合間に頻繁に外来へとやってくる。先生たちは彼らをお客さんとしてただ見学させるだけでなく、実際に患者さんの身体所見を学生たちに取らせたり、鑑別診断を行わせたりするなど診断学を教えるのにも積極的である。

- ・ アドバンスドオスキー

実習中に 4 回生の整形外科の試験を見学する機会があった。試験は二日間あり一日目に選択式のペーパーとオスキー、二日目にロングケースとショートケースという二種類のアドバンスドオスキーがある。アドバンスドオスキーは診断能力の向上に一役買っているようである。

- ・ 英語による教育

日本の教科書を持っていると「日本では日本語で医学の勉強があるの？」と驚かれる。UNIMAS に限らず諸外国では医学教育は英語で行われるのが当たり前であり、これによって医学生や医師が国の間を行き交うのを容易にしている。しかしかなりの患者は英語を喋れないので結局は医学英語を自国語に翻訳する必要がある、英語による教育は一長一短あると思う。

また、大阪大学の方が優れている点として次の点がある。

- ・ 1、2 年次に数学や物理などの自然科学を学ぶ機会がある

UNIMAS には私たちのようにゆっくりと自然科学を学ぶ機会はない。逆に言うと、全ての学生が自然科学の素養を持っている事が日本の優れた研究を下支えしているのではないかと思う。ちなみに UNIMAS の解剖は献体ではなく模型を使って行うそうである。

- ・ 最先端の研究に触れる機会がある

UNIMAS では最先端の研究はあまり行われていないようであり、講義で研究の話聞くことはほぼ無いそうである。UNIMAS の生徒が阪大の教育で一番羨ましがっていたのはこの点である。

どちらの大学の教育も一長一短であるが、私の希望としては今の阪大の最先端の研究の講義内容は維持しつつ、UNIMAS で受けたような外来での教育をもっと充実させて欲しいと思う。